「分社・取次所」が設置された。

内国通運会社（県内の分社・取次所）一覧

一　分社　大分郡大分町　下毛郡中津町

一　取次所　国東郡－高田村　竹田津村　浜村
　　鶴川村　古市村
　　速見郡－日出村　豊岡村　別府村
　　野原村　立石村　川上村
　　他の郡－（省　略）

だが、この内陸通運会社の独占的営業も永くは続かず、十二年五月には陸運事業の免許制も廃止され、旧前の個別的営業が復活した。この間、明治十年には西南戦争が起きるなどして、全国での組織的かつ近代的な営業には業者が容易になじまない事情もあったのであろう。

その後、本県では、十八年に「駅伝営業取締規則」、ついで二十年には「陸運営業取締規則」が公布されている。

本稿の作成には、『大分県史』（近代編Ⅰ）で執筆に当られた吉田豊治氏＝前県立図書館長の先駆的研究に負うところが多い。記して厚く御礼を申し上げる。

別府で開かれた「九州小安居」

佐藤嘉一

昭和十年一月初旬、東京より土屋文明を招き、別府市浜脇の土佐屋旅館において「九州小安居」というアララギ歌会が催された。ここでは土屋文明のその頃の動きを中心にして、わざわざ別府まで西下してこの会の指導に当った意義を考えてみたい。

一

「小安居」は仏教の「安居」から来た語で、「広辞苑」には「僧が一定期間外出しないで、一室に籠って修行すること。陰暦四月十六日から始まり七月十五日に終る。雨安居、夏安居、夏行、夏籠などという。」とある。

仏教の安居にならい、島木赤彦が提唱して大正十三年七月二十九日より三日間、長野県上諏訪の阿弥陀寺においてアララギ安居会として激烈峻厳な歌会を開いたのを始まりとする。以後、翌十四年には延暦寺で（これから斎藤茂吉、土屋文明も出席を始める）、翌十五年は埼玉県三峯山で、昭和二年には永平寺でと毎年開催してきた。期間中は酒類禁止で、早朝より深更まで歌会、講話が続き、閉会の頃には精魂尽き果てた模様であったことは今もって伝えられており。茂吉の随筆集「不断経」のなかにも記されている。昭和三年八月には阿蘇湯の谷でも開かれたが、この安居での土屋文明の論鋒特に厳しく、アララギの今後を期した熱気の溢れる言動であったと聞いている。このようなことから、土屋文明を招いて福岡・大分の関係者を中心に歌会を開いたのが「九州小安居」である。

二

昭和五年のアララギ五月号から斎藤茂吉の後を継いで編集発行人となった土屋文明は、今までよりもさらに写実短歌の根幹を把握して抒情性を除去し、即物的詠風の確立に当った。小安居のあった昭和十年のこの頃は、文明の第三歌集「山谷集」（昭和十年五月刊、岩波書店）の最後の「山峡徜徉」の大作から「六月風」（昭和十七年刊、創元社）の冒頭に当る時期で、自然よりも人間生活を、そして単なる個人的な生活よりも社会機構のなかでの個人の働きを歌にする方向を明確にとっていた。これは従来のアララギには余り見えなかったことで、さらに土屋文明は自己の預かる選歌のなかでもそれを反映させていた。

こうした文明の動向は、当時の年少気鋭の地方アララギ会員の支持も多く、地元からの出席要請とともに進んで各地の歌会をまわり、微温的な指導ではなく、文字どおり叱咤激励の会を重ねていた。

今、昭和九年の一年だけをとって地方のアララギ歌会へ出ていった足跡をたどると次のとおりである（橋本徳寿「土屋文明私稿」による。）

三月　大阪歌会（露ノ天神）　京都アララギ歌会（来光寺）　名古屋アララギ会（番茶の家）

五月　平福百穂追悼歌会（上諏訪、高国寺）

七月　埼玉アララギ歌会（熊谷、清気庵）　北海道アララギ会（支笏湖畔、中村旅館）
十月　北陸アララギ会（金沢、卯辰山金園）
十一月　埼玉アララギ会（三峯登山口）　東北アララギ会（仙台、仙風園）

全く東奔西走の観があり、この年、斎藤茂吉が「柿本人麿　総論編」の稿を始めたが、その傍ら熊野本宮付近を訪ねており、それにも同行し、また大部な「中村憲吉追悼号」を発行するなど、実に多面的な活動を行っていた。そして十年一月はじめには北九州の歌会に出席し、のち大牟田を経由して一月四日夕刻別府に入ってくることになるのである。

三

当時発行されていた「大分アララギ歌会『会報』」をみると、この小安居会は福岡アララギと大分アララギの共同主催となっている。だから大分県から出席なら小倉に集まっても開けるし、福岡県からなら大分市でも開ける筈である。にもかかわらずなぜ別府で行ったか。私は次の理由によると考えている。

一つは文学的理由というか、特に土屋文明と徳田白楊の関係からであるが、昭和八年二十一歳七か月の若さで病死した徳田白楊（本名、森下文夫）の作歌を導いたのが土屋文明であることである。代表作とされる次の二首に見えるとおり、清純にして真情がこめられ、極めて完成度の高い作品を多く残している。

夕飯を食べつつあれば雁が音のたまゆら聞え母の恋しき　（昭和五年）
宵々に雁鳴き渡るこのごろのわがむらぎものこころ寂けし　（昭和六年）

「夕飯を」の一首は大野郡緒方町徳田の生家の墓に彫ってあり、「宵々に」の歌は瓜生鐵雄の筆による歌碑にも刻まれている（緒方町立米山中学校に現存）。

昭和三年より大分新聞短歌欄の選を受持った土屋文明は、投稿した白楊の作に他を越えた優れたところを見出し、以後特別に目をかけていた。昭和四年九月、大分新聞主催の短歌会に来分した文明に初めて会っており、次いで六年よりアララギに送稿を始めた。この前年、昭和五年六月に腎臓を病んで別府中村病院に入院し、左腎臓

摘出手術を行っている。そして八月十日に退院して二か月ほど新町林旅館に留まった。その頃の中村病院は今の浜脇二丁目の河下医院にあったことは入江秀利氏の教示による。十月には帰郷し、翌六年、次いで七年と次々に病を発し、病床に苦しむことになるが、中村病院に入院中の時折、松原公園まで足を伸したり、或いは朝見川のほとりを暫し歩いたこともあった。

わが病いまだ癒えざるにこの夕べ松原公園にひとり来にけり

朝見川にこの夕べ来てさびしかも川上の山々うすけぶりゐて

などの一八首が「松原公園」と題して残されている。

こうした記述はすべて土屋文面編集による「徳田白楊歌集」（初版は昭和九年六月刊）に拠っているのであるが、文明の懇切な序文のなかにさらに昭和八年一月、鹿児島へ行く途中を別府で車を降り、病床を見舞おうとされて本屋（三河屋書店か、今の西日本銀行の所にあった明倫堂書店のどちらかであろう。）で上緒方村（当時）を示す地図を求めたと記している。しかし病いへの影響を慮って中止した事情や、その後、歌会の席で白楊の作品を賞揚した様子を細かに記している。

土屋文明の徳田白楊に寄せる指導者としての恩情の実に深いもののあったこと以上の通りであり、白楊死後間もないこの時期に別府で、しかも白楊の病気治療ともつながる浜脇で会を開くことは十分に文学的必然性があったといわねばなるまい。

もう一つは地理的な観点からであるが、松山から永井ふさ子、大阪から望月道子、堺から岡崎まつ枝等が参加しており、当時の大阪商船を利用して別府港へ着くのが普通であったから、遠来のこうした人々を考えれば別府で開催するのが自然であったろう。

また、当時京城医専教授であった大塚九二生や京城在住の下ノ江桂も出席しているが、大分県出身者であるから、この歌会の出席も兼ねて年末年始の帰郷をしていたものと思われる。

なお、浜脇土佐屋旅館が会場となったのは、当時のこの地最大の旅館で、約三十名の参加者の収容が可能であったからである（三泊四日食費込みで七円であったよう

だ）。土佐屋との交渉は、その頃南町に在住していた丸山待子が当ったものと思う。

土佐屋旅館は入江秀利氏によると、現在の中島橋から南側の横道路が開通するのに、旅館を突っ切る形になったので、それを機に廃業したとのことである。十年ほど前には玄関付近の一部も残っていたが、現在は全くその跡を留めていない。

四

前出の「会報」昭和十年二月一日発行の分に、安部迪雄が「九州小安居会の記」と題して行事の大要から提出歌の全部にわたって記しているので、それを摘記することでこの会の模様を伝えたい。

先ず日程の概要をみると、一月四日「午後六時三十分、昨年全通せる久大線経由にて土屋先生御到着。一同晩餐を共にして講堂に集まる。」とあって、午後八時から九時まで集会。荒川左千代の開会の挨拶。土屋文明の挨拶。各自自己紹介。行事日程の説明ののち各自の室に帰り、十時就寝。

一月五日、午前九時より十一時四十五分まで「万葉集百首選」について土屋文明の講話。午後一時より四時半まで詠草批評。大塚、下ノ江、友広、富吉、今永、芳賀、時松、山崎の八名四十首終了。進行係は前半荒川、後半松井一郎。午後七時より八時半まで土屋文明に質問する会。以後十時十分まで大岡、中武、庄野、松井の二十首の批評を行う。進行係松井。

一月六日、午前八時半より十時半まで万葉集巻二を中心とした土屋文明の講話。十時半より正午まで永井、高野、荒川、望月、安部、殿畑の歌三十首を批評。進行係児島脩吉。昼食後、玄関前にて一同記念撮影。午後一時より五時十五分まで岡崎、渡会、児島、土田、瓜生、諸岡、財津、西の歌三十七首批評。進行係児島。午後七時より十時まで参会者のなかでアララギ一月号掲載の芳賀ほか十一名の歌を批評。進行係荒川。

一月七日、午前八時四十分より十一時四十分まで万葉集巻三につき土屋文明講話。午後一時より五時二十分まで藤原、松本、丸山、秋友の歌十六首批評。続いてアララギ一月号掲載の荒川ほか七名の歌を批評。進行係瓜生鐵雄。午後七時より十一時十分までアララギ一月号其二

前列向かって左から５人目土屋文明。その隣は土佐屋旅館主人

の辻村、鹿児島等九名の歌を批評。進行係荒川。

一月八日、朝食後一同解散。以下「会報」の通りに記すと「土屋先生午後十二時二十五分出帆の大阪商船紅丸にて、道後温泉に向けて御出発。永井氏同行。大塚、金石、瓜生、庄野、土田、西、丸山、安部諸氏大分港まで便乗、大分港にて荒川、大分新聞社牧氏と合し、御見送申しあぐ。」とある。

歌評の状況は、初日の例からみると約四時間に四十首批評しており、一首につき平均六分間、一人の作につき三十分間を要したことになる。各人の五首を一括して順番により二名が行い、次に各自自由に意見を述べ、その後適当者を指名して批評させ、最後に土屋文明が行う形をとっていた。朝から夜の十時頃までで、三日間にわたるのだからかなりハードな日程であった。

どのような批評が行われたか具体的なことは伝わっていないが、参会者の年齢と顔触れからみて相当の熱気と充実した内容であったろうことは十分に想像できるところである。

この会の姿を一層明らかにするため、参会者の詠草一

人五首のうち冒頭の一首を挙げることにする。

○　京城　大塚　九二生

天通ふ風をいたみて石たたみまつれる祠神さびてけり

○　京城　下ノ江　桂

あかときの内金剛駅に下り立ちて霧にぬれたる砂利をふみゆく

○　山口　友広　保一

山崩の砂地踏みゆけば枯萱の靡交ふ径に入りてゆきたり

○　福岡　富吉　秀夫

俯向きて講義する卓に生徒らが今朝いけかへし水仙にほふ

○　中津　今永　助夫

荒波のたぎちとよもす洞中を吾乗る舟はためらひて行く

○　小倉　藤原　哲夫

桑の上をのび来しさむき日光床の柱を暫し照らしぬ

○　長崎　芳賀　日出男

魚荷ひて峠の道を下る人を山の上より吾ら見てをり

○　大分　時松　節夫

奈多の海の清き砂浜白砂にはらばひてみる四国の島山

○　佐賀　金石　淳彦

馬太伝読みて清々とゐし夜半に金のことにてこだはりはじめぬ

○　福岡　山崎　真吾

かわきたる貯水池の中草あかきあひだをつたふ浸水の音

○　松山　永井　ふさ子

遥かなるウエストミンスター寺のクリスマスの鐘を聞かんとしまし立ちたり

○　東京　大岡　亮子

水涸れし水路の底に踏みてゆく石のあひだに草紅葉せり

○　宮崎　中武　茂八郎

刈田のなかに朝の日の射す菜畑に行く道ありて独り佇ちをり

○　福岡　庄野光子
茂り立つ檜林こえてうらがるる高野原の道とみに明るき

○　福岡　松井一郎
ひろびろとただひといろの虚しさにうら枯れたりし草の高山

○　福岡　高野康子
初霜はすでに幾日前に降り土にかたむきてサフラン咲きぬ

○　大分　荒川左千代
あたたかき海のほとりをきて遊ぶ紅葉はすでに霜にいたみし

○　大阪　望月道子
百舌鳥耳原の一もと椿月影さし葉群ことごとく照り出でにけり

○　中津　安部迪雄
瓶にさす紅ふかき寒牡丹の花弁おもくたわわに咲きいでし

○　大分　殿畑豊治
二十三夜の月出でたるか照らさざる昏き海原に鳴く鳥の声

○　堺　岡崎まつ枝
冬温む田圃の畔にたんぽぽのみぢかく咲くは摘まずゆきたり

○　福岡　渡会浩
山紅葉映えてあかるくひえびえと湖の上とほく光さしけり

○　福岡　児島脩吉
たぎつ瀬の音のこもれる峡路ゆき紅葉ぬれ光る林を下る

○　別府　丸山待子
楠の実を踏みて来れる寺門に虚堂録提唱の文字ふとぶとし

○　福岡　土田史都子
庭くまの水のたまりのやうやくに干ける見れば白飯の粒

○　大分　瓜生鐵雄

しらじらと草野をはしる水見ればうらなぎゆきぬ日のくれぐれに

○　佐賀　諸岡秀夫

峡をきてそひゆく河に瀬頭のしらじらと見ゆ日のくれぐれに

○　大分　財津政男

あわただしく仕事終りし日の暮に病を告ぐる葉書とどきぬ

○　大分　西稲子

国とほく来し姑とけふも出遊びつ故郷の母をおもひ悲しむ

○　別府　秋友しか子

いく年もかかることなくすぎて来つ日の暮おそく板間ふき居り

○　下関　松本閑生

衰へし弟は再び手術するといふ医師の言葉をすなほにきけり

五

二年後には日支事変が始まり、戦線の拡大するなかで藤原、瓜生両氏は召集を受けて辛酸をなめ、荒川、安部両氏は終戦前後、満州や台湾でその生涯を終えた。戦前、県内でこうした規模で開かれた最初にして最後の会であった。

掲出の作品でも分るとおり、本歌会詠草では個性の見える作は少ない。しかし集まった多くは未だ歳若く、戦争をくぐりぬけた人々は、戦後、アララギ歌会を基に個個に成長していくし、本会を共にしたとの連帯意識も濃かったようで、それが作歌上の相互研鑽にも結びついた。そのことからでも本会の意識は少くない。

土屋文明は、歌集「六月風」（昭和十七年刊）の冒頭に「徳田白楊を偲ぶ　別府松原公園にて」の作を収めているが、そのなかの一首

相寄りて君をかなしみ橋わたるほのぼの清き三日月

立てり

は、一月六日か七日の夕食後、午後七時からの会の間、参加者数名と土佐屋を出で、朝見川橋を通って松原

公園に至る時のことを歌ったものである。冬季の三日月はこの橋からみると尺間社のある山上にかかる。

この一首は、土屋文明自選の岩波文庫「土屋文明歌集」（昭和五九年刊）にも収められてあり、こうした優れた歌の舞台となったのが浜脇で開かれた本会であった。

参加者の殆どは鬼籍に入っており、現在アララギに出詠している藤原、友広両氏もすでに八十歳を越えている。参加者のなかの最年長であった土屋文明は本年百歳になり、アララギの冒頭に真情の籠った作品を今でも掲げている。

本稿を記すに当って、佐伯市在住のアララギ会員小谷種一氏より関係資料を借用した。氏は仕事の都合上この会に出席できず、土屋文明はじめ参会者からの寄せ書きを貰ったが、今なおそれを大切に保存されている。氏に写実の手法を固く守り、何事にも実際を尊ぶアララギ会員独特の気質をみるのであるが、こうした人々の集まりが「九州小安居」であったようにも思う。

（一九九〇、七、一一）

名勝解説　別府温泉地獄巡り

星野純郎

私の手元に昭和十三年発行の別府鳥瞰図（ちょうかん）があります。小さなところまで大変丁寧に書いていて、建物の形まで実に良く似ています。私の家の近くに金光教会の建物で、宮建築の大変立派なものがありますが、その会堂への上り口の階段がよく分る程良く書き込んでいます。それが初まりで次々と見ていると、公会堂の入口の形や広い階段、その両脇の石の壷まで書いています。昔、一番の賑いを見た松原公園の周りには、松涛館があ